

はまだあらわれてはいない。

著者は、はやくに正統的な記憶研究で一家をなしたあと、こころの科学の新しいパラダイムをもとめて模索をつづけてきた。わざ、伝授、未知の構想、身体、道具、自己、風土、インドなど探究の対象は多岐にわたる。わざや伝授のように、具体的な研究としてすでにおおきな影響をあたえているものもあれば、基本的なアイデアの展開をはかっている段階のものもある。一貫しているのは、かかわりのなかで包括的にこころを捉えようとする方向性であり、本書はそれが臨床の知という観点から、わかりやすくまとめられている。

海外の権威をなぞることが、まともとみなされている日本の人文社会系では、独自の探究は疑わしくみられる。しかし、オリジナルな貢献は、独自の探究と時代の問題状況が出会ったところにしか生まれない。評者は、著者の探究の中間的総括というべき本書を読んで、状況論あたりで、そうした幸福な出会いが生ずるかもしれないという印象をもった。（雨宮俊彦）”

この他、『真宗』（第1083号 平成6年6月10日）にも紹介されたときく。最後になるが、本書への著者の思いを次の短文に託したい。

謹呈

生きるもの・生きること、この分かちがたい世界を自らの身体のかなかに統合し、生の実感を味わいたいものです。昨年の夏、インドのラジャスタンを一ヵ月余り彷徨しましたが、そのさいしばらく滞在したタール砂漠の村人の生活は実にもの静かであり、対決と調和のなかに一つのコスモスを見出しているように思われました。

平成6年 春 著者

これは本書を謹呈したさいに書き添えたものである。当時の、そして現在の私の偽らざる心境である。なお、今回の変則的な「書評」を契機にいく人かの読者とある世界を共有できるとすれば、著者としてはこのうえない喜びとなろう。（野村幸正）

書評 D・エラスムス著

中城進訳『エラスムス教育論』

二瓶社刊（1994. 12. 10）2,800円

7年ほど前からラテン語に取り組んでいた中城進さんが、エラスムスの翻訳書を出版された。これまで、本誌を中心に訳稿を発表されていたのをまとめ、さらに詳細な訳注と解説を加えられている。私はルネッサンス期の教育思想についてはまったくの門外漢で、書評の任には

ふさわしくないのだが、この翻訳書について、簡単なコメントをさせていただく。

本書は、エラスムスが著した三つの論文、『子供たちに良習と文字とを惜しみなく教えることを出生から直ちに行なう、ということについての主張』（1529）、『子供の礼儀作法につ

いての覚書』（1530）、『教育的勸告』（1522）とそれらについての訳者の解説からなっている。

さて、本書で訳出されているエラスムスの論考は、必ずしも、エラスムスのオリジナルな考え方が表現されているわけではない。むしろ、訳者が注でいねいに指摘しているように、当時読まれていたそれまでのさまざまな教育論に依拠しながら、それをまとめあげたという性格をもつようである。そしてエラスムスが子どもの教育についての主張を書こうとする執筆の動機の背景には、印刷術の普及や当時のヨーロッパの上流階級層が子どもの教育や礼儀作法についての関心をもつようになってきたという歴史的状況が存在する（本書207頁以下）。それ以後の近代社会が「子どもたちに対する「特別の教育」を普遍的に求め始めた時代であるとするならば、このエラスムスの書物に代表されているであろうルネサンス期の教育論は、その先駆けであるといえる。

つまり、それは、人間の本性そのものが一種の普遍性をふくみ、それがまさに人間的自然とされ、そこから、人間が意図的に形成されなければならないものであり、教育をされる必然性があるという論理が導きだされている。そしてその教育の必然性は、良き教育を行うことが人間の自然性に根ざしたものであり、教育や人間形成が同時に、理性に従って善く生きるという、道徳的な要請をも満たすことになる。

「確かに、獣という被造物は彼らに特有の機能を保持する手段を、すべてのものの母である自然から与えられています。ところが、神様の摂理におきましては、すべての被造物の中で、人間にだけ理性の力が授けられており、そして足りない部分を補うために教授というものが人間にはあるのです。・・・人間の根源的な完全なる幸福は正しい教授と正当な教育にあるといえるのです。・・・正しい教育とは、特に私たち人間に残されているものなのです。全く同様に、このことが他の生き物にその本性が授けられている理由なのです。・・・人間だけが弱く、裸で、無防備につくられているのです。しかしそのような（他の生き物が本性として持つ）すべての属性の代わりに、人間は教授に向けた精神を与えられているのです。・・・人間はあらかじめ仕込まれていなければ、食べることができないし、歩けないし、話をしたりすることができないのです。」（『エラスムス教育論』15-17頁、括弧内は引用者の補足）

個々の人間が可塑性をもち、一定の目標への「発達可能態」であり、そこに人間の主体性と本性をみるというのは、それ以後の近代の人間観、教育観の基礎となる。しかし、現在、そうした人間観、教育観が批判的に問われているとすれば、エラスムスに表されているルネサンス期の教育観を原典に即して詳しく検討することこそ求められているのではないだろうか。訳者の今後の活躍を期待したい。（山本 冬彦）